

* よどじん *

梅田に向かう阪急電車の窓の外に、いつも広がる景色がある。
都会の真ん中を悠々と流れる一級河川「淀川」。
時に荒々しくも、日々見せてくれるその穏やかな流れに心が癒される。
そんな淀川の自然に魅せられ、共に生きる人がある。

今月のよどじんは、 淀川に魅せられて50年 「川と共に生きる」

かわい のり ひこ
河合典彦さん (大阪市立中学校理科教員)



リアルな大自然

振り子の要領で勢よく繰り出された投網が、川ごと呑み込みそうな大きな輪となり、水面をとらえる。ゆっくりと、そして力強くとぐり寄せられた網の中では、エビや小魚がピチピチッと水音を立てている。

ここは十三干潟。潮の引いた時に現れる湿地帯で、多くの生物が生息しており、電車の車窓からは想像しがたい大自然のリアルな姿に出会える。

見事な手さばきで投網を操るその人物こそ、今回のよどじん河合典彦さん(58歳)である。一見すると「地元の漁師さん?」と見間違えそうだが、普段は市内の中学校で理科教員として教壇に立つ。

淀川との出会い

生野区で生まれ育った少年は、小学生の頃に旭区の親戚の家に遊びに行き、運

命の川「淀川」と出会う。それまでも近所の空き地で昆虫を追いかける、自然が大好きな少年だった。しかし、ひとたび足をふみ入れた河川敷で、そこに生息する生き物達に心を奪われた。

中学生ともなると、週末の度に自転車やバスで駆けつけ、決して危険な本流には行かないという親との約束の下、左岸(旭区)に存在する「ワンド」と呼ばれる水環境で川に没頭した。

バスの中で再現!?

たくさんの生き物をただ捕まえるだけではない。河合少年はそれをビニール袋に入れて研究用にせせと家に持ち帰るのだった。その当時は携帯式的エアポンプなど無く、自転車の空気入れを改造して、手動でビニール袋に空気を送り込んだ。忘れられない思い出がある。「たくさんの



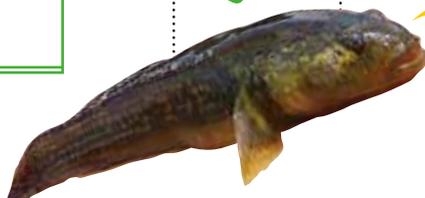
▲大きく口を開いた投網が水面をとらえる



ワタシ達はヤマトシジミ泥の中で生活してるよ

映像だけじゃ 分からない

ボクは千千ブだよ体がヌレヌレ〜



都会の真ん中に突如出現!! 生き物がた〜くさん、十三干潟って知ってる?



干潮になり水が引くと、広い泥や砂の浜が現れます。そこが干潟。十三干潟付近は川の水と海水が混ざり合う汽水域と呼ばれ、シジミやエビ、カニなどたくさんの種類の生き物が暮らしています。淀川区には十三干潟というとても貴重な自然の宝庫があります。

◀ 広大な干潟にベタベタと足跡が続く